

本宿犬猫病院 レントゲン室と診察室の両方から X線画像処理システムが操作できる環境を構築

低予算で飼い主と密なコミュニケーションが取れる快適な医療環境へと変化



会社名：本宿犬猫病院

本宿犬猫病院は、東京の吉祥寺にある個人経営の動物病院である。犬や猫をはじめとし、鳥、うさぎ、ハムスターなどの小動物の診療を主に行っている。

院内には、レントゲン写真をデジタル化できる「X線画像処理システム」を導入している。このシステムで処理された高精細な画像は、病気の診断や飼い主へのインフォームドコンセントに活用されている。



導入前の課題

飼い主に移動してもらうことなく X線画像処理システムの出力を見せながら説明したい



本宿犬猫病院

この病院の診療スペースは、当院の院長である堀口院長の自宅の一角に構えられている。わずか4坪のスペースに、待合室、受付、診察室、レントゲン室、入院設備を配置し、必要機材を置いているため、院長が診察で行ったり来たりできるだけのスペースしかなかった。

診療の過程では、必要に応じて、レントゲン写真を飼い主に見せながら説明する場面もあるそうだが、堀口院長は、かつて、この部分に悩みを抱えていた。

このシステムはレントゲン室に置かれていたが、これがインストールされているサーバーにキーボード、モニター、マウスを直接接続していたため、この場所では操作することができない。しかも、レントゲン室は、飼い主が出入りする待合室から最も遠い位置にあり、レントゲン画像を確認するには、飼い主にも診察室などを経てレントゲン室に入ってきてもらう必要があった。

このシステムにはサーバー・クライアント版も提供されており、追加ライセンスを導入すれば、レントゲン室以外の場所からでも操作できるようになるが、導入費用をなるべく抑えたいと考え、躊躇していた。とはいうものの、飼い主の方に強いている不自由さを解消したいという思いは変わらない。できることならば、もっと費用をかけずに、この問題を解決する仕組みを作りたいと考えていたようだ。

購入のポイント

VS-162 と CE600 でレントゲン室と診察室の両方からシステムを操作できる環境を構築



VS-162
2ポート DVI 分配器



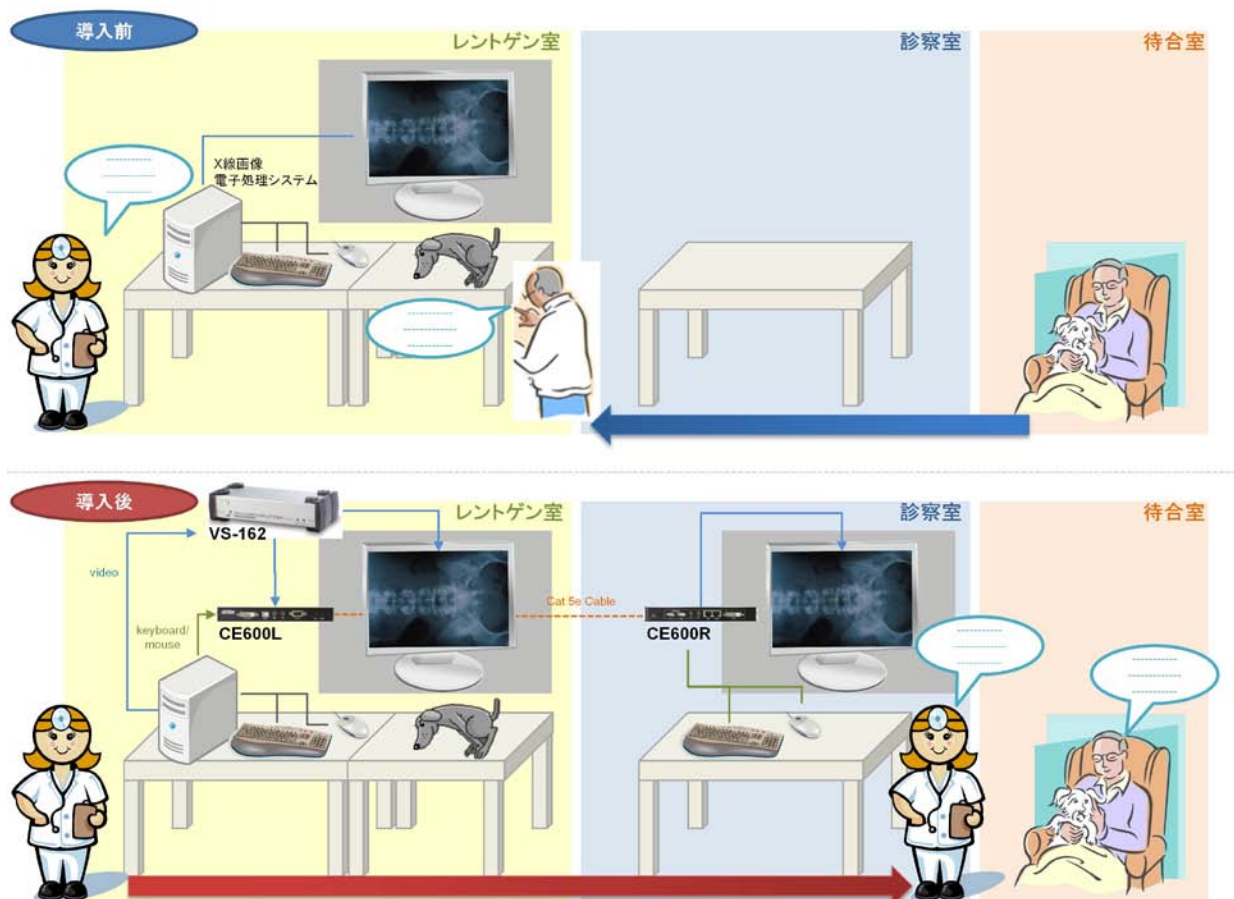
CE600
DVI KVM エクステンダー

運用面の課題を解決するべく、堀口院長は、医療システムを専門に取り扱っている業者に相談。要件は3つあった。飼い主に移動の手間をかけることなくレントゲン画像を見てもらえること。また、高精細なレントゲン画像を取り扱うため、システムの仕様に合わせて1920×1080の解像度に対応していること。そして、既存のX線画像処理システムのクライアント&サーバー版よりも費用がかからないソリューションであることだった。

その業者が過去に ATEN 製品を使用していたことがきっかけとなり、ATEN ジャパンから機器構成を提案。解決策は、奥にあるレントゲン室と手前の診察室の両方からシステムを操作できるようにする方法であった。

具体的にはこうだ。システムの出力映像を DVI 分配器「VS-162」で2系統に分配。このうち、1系統はレントゲン室のディスプレイに出力。もう1系統は、システムのキーボード・マウス信号とともに、KVM エクステンダー「CE600」で診療室まで延長。こうすることで、従来の操作環境を残しながら、診察室でも同じようにシステムを操作できる。診察室からは扉を開ければすぐに待合室にいる飼い主に声かけられるため、わざわざレントゲン室に移動してもらう必要はない。

ATEN 製品には仕様の面でもメリットがあった。CE600 での延長には、手ごろでスリムなカテゴリ 5e ケーブルを使用するため、天井裏を這わせてケーブルが延長できる。製品自体も小型であるため、院内のスペースを圧迫しない。さらに、システムのグレードアップで追加ライセンスを購入するよりも、はるかに費用が抑えられ、コストパフォーマンスが高い点も有利に働いた。こうして、ATEN 製品を導入することが決まったそうだ。



導入の効果

低予算で希望を実現。医師と飼い主の双方が快適にコミュニケーションできる診療環境へと変化

今回の導入によって、かねてから希望していたシステムを低予算で構築することに成功した。VS-162 と CE600 の組み合わせで、わずか 10 万円足らずであったため、当初、想定していた予算をはるかに下回り、出費を抑えることができた。

また、院長が診察室まで移動して、待合室にいる飼い主の方に直接説明できることにも大きなメリットがあった。基本的に診療業務は院長一人で行っているため、以前は、レントゲン室と診療室の間を行ったり来たりしていて動線が複雑になっていたが、今では 2 箇所から同じシステムを操作することができるため、動きが簡素化されてスムーズになったそうだ。

そして、これと同時に、大きなリスクを回避することができた。安全には十分気を付けているとは言え、放射線を取り扱うレントゲン室まで飼い主の方に移動してもらうのは、ためらいがある。しかし、今は、飼い主の方が診療スペースに立ち入る必要はないため、万が一の事故に巻き込むことは皆無に近い。飼い主も待合室で説明が聞けるので、狭い通路を移動するという不自由を強いられることもない。快適な環境で、高精細なレントゲン画像を見ながら、医師から詳しい説明を聞いた上でペットが診察を受けられれば、当院の医療サービスに対する顧客満足度もおのずと上がることになる。今回の導入によって、医師と飼い主の双方が気持ちよくコミュニケーションが取れる空間へと変えることができたと言えよう。

感想・今後の展開

製品の手軽さを実感。高い費用対効果で希望を実現する ATEN ソリューションに感謝



レントゲン室の VS-162(左下)と CE600L(VS-162 の上)。ディスプレイの下に置いて診察の妨げにならないコンパクトな筐体



診察室からでもシステムの操作が可能。扉を開ければ、待合室の飼い主と直接コミュニケーションが取れる空間に

今回導入した ATEN 製品は、ケーブルを接続すれば、すぐに使える手軽さが魅力だという。セットアップや操作も直感的にできるし、一度セットアップしてしまえば、あとはそのまま好きな場所から操作することができる。複雑な操作は一切不要だ。

そして、やはり、飼い主の方に席を立ってもらわずに、診察室で直接システムを使って画像を表示したり、説明したりすることの便利さも改めて実感しているそうだ。診察室の扉を開ければ、飼い主にすぐに説明ができる。非常に効率的な環境で院長自身も気持ち良く診療できるため、相乗効果で、ますます良いサービスが提供できるに違いない。

もしかしたら、今回導入した製品以外にも、堀口院長が抱えていた問題を解決する手段はあったかもしれない。しかし、実際の予算に見合ったものとなると、意外にもそれほど多くないのが実情であろう。今回は ATEN 製品によって、費用を最小限に抑えながらも希望を叶えることができた。そのことに心から感謝したい、と堀口院長は語っている。